

しゃくなげ賞

「大好きな君に
ありがとう。」

福岡県久留米市

福岡教育大学附属久留米小学校5年

上野 愛奈

私が通っていた幼稚園には、青空
いっぱい手を広げ、堂々と立つ一
本の木があった。運動場の真ん中で
春夏秋冬、暑いとき寒いときにも、
ずっと立っていた一本の木。青空
いっぱい葉っぱを広げ、大地に強
く深く根を張っていた。

そんな力強い一本の木をみんな
「ママ」と呼んでいた。なぜなら、
なんだか甘ずっぱい香りのする葉で
私たちを包みこんでくれたから。そ
れは、まるで母の香水のようで安心

できたのだろう。その木を、私たち
はみんな大好きだった。うれしいこ
とがあったとき、何か自分のなやみ
があったとき、つらいことがあった
とき……。そのときは、みんな木の
ところに集まり、語り合った。

「ママ、今日ね、とつても楽しかつ
たんだよ。○○ちゃんと遊んだん
だよ。」

と、どんなささいなことでもその木
に話す。

すると、その木は

「そう。そうだったの。良かったわ
ね。」

と言いつつ、うなづくように葉っぱをゆ
らした。そうすると、とても嬉しく
て私は木に今日の出来事を話すのが
習慣になった。

「今日は、ケンカしちゃった。」
と、時には悲しい相談をすることも
するとやさしい、やさしい木は、い
つものようにあの緑色の葉っぱをゆ
らし、私をなぐさめてくれるのだっ
た。

「大丈夫？ 謝らないの？」

と、アドバイスをくれることも。そ
れは、だれよりも自分のことを分
かってくれ、支えてくれていた証
だった。母よりも、素敵なアドバイ
ザーにめぐり合えたと思ったり。

自分が帰ろうとするとき木の近く
で泣いている子を見かけた。でも、
次に通るとその子はニコニコ笑いな
がら、木をなでていた。ママがなく
さめてくれた!! と自然と私は思っ
た。嫌な気持ち、嬉しい気持ちのと

きもそばにいてくれた木。その木と共に送る日常生活はそう長くはなかった。

なざしで見守ってくれたママ。そう思うと、目がうるみ必死で涙をこらえた。

夏休みが明けると、先生から

切り株のママにみんなが座った。

「ママが、切られることになりました。」

もちろん私も座った。切られてもママは、まだ見守ってくれているんだと実感して嬉しかった。いつも見

と告げられた。私はブーイング。とつても悲しかった。私は帰りがけに別れのあいさつとして木のもとに向かった。みんな、集まっていた。

守ってくれたママ。その後、みんな一せいに「ママ、ありがとう。大好き!!。」

みんなで泣いた。みんなで別れを告げ、みんなで笑った。木も笑い、でも少しさびしがっているようにも見えた。

と、さげんだ。この声は、大空に高らかにひびきわたった。大空では小鸟がなっていた。

休み明け、もう木はなかった。

大好きな君にありがとう。

やっぱり悲しかった。最後の最後まで私たちを支え、笑わせてくれたママ。ずっとずっと私たちを温かいま

ずっとと忘れないよママ。
ずっと、ずっと。いつまでも…。